

やはり俺とキセキの世代は間違っていた。

右海

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイルと黒バスのクロスオーバーです。

修学旅行直後に八幡は和解することなく転校します。

キセキとの再会やら、2年目の誠凛やほかの高校を描いてくつもりです。

※コメントで指摘頂き、作者自身無理を感じたので八幡は黒子世代の1つ上、先輩にすることにしました。突然の設定変更申し訳ありません。

作者はバスケかじった程度なので描写がおおざっぱになるかもしれません。

目次

| | |
|-----------------------------|----|
| そして俺はキセキと再会する。 | 1 |
| しかし俺は火神大我に期待する | 6 |
| 未練とか後悔とか反省とか。 奉仕部 s i d e | 10 |
| しかし彼の部活動はいつも突然始まる | 15 |

そして俺はキセキと再会する。

「人の気持ちもつと考えてよ」

彼女の心底辛そうな表情を忘れられない。

俺たちの関係は酷く曖昧で、だからいつか訪れる別れだった。それが『今』だったというだけのことだ。だから……気にすることなんてない、はずなんだ。由比ヶ浜結衣の叫びも雪ノ下雪乃の怒りも涙も、俺には関係ないと。

――

――

両親の仕事の関係で引越すことになったのが修学旅行直後の二期半ば。最愛の千葉を離れ、晴れて俺も都民としての生活を………つて、いや全然離れてないじゃねえか。なんだそれ、近すぎかよ……。これくらいなら千葉から通えよ………というのは無理だな。まああれだ、近すぎて毎週千葉に帰るまでである。

……いやないわ。労力的に。ふつーに家で寝る。

新居はなかなか広い家だった。どうやら、転勤というのも栄転に近いらしく、昇進を兼ねて東京の本社に勤めることになるというのが実態のようだ。いやまじでか。やるじゃん親父。よく働くいい奥さん見つけたよあんだ。

自室の荷物を広げ終わり、リビングでゆっくりしようとしている俺に、小町が「邪魔だからどつか出ててね」というのは仕方ないことかもしれない。でもね小町ちゃん、お兄ちゃんも傷つかないわけじゃないのよ？ほんと。

仕方なく近所を散歩していると、そこそこ大きな体育館らしきものを見つけた。どうやら何かの大会をやっているようだ。

八幡「ウィンターカップ：バスケット」

正直に言えばいい思い出はない。それでも足が向いたのは、聞きなじみのある名前を耳にしたからか。

体育館の中は熱気に溢れていた。歓声とブザーの音が響き、丁度試合が終わったことがわかる。対戦していたのは秀徳高校と誠凛高校。

スコアは104ー104。同点か、どうすんだこれ。延長とかすんのか。

考えながら選手のいるコートを見ると、知った顔が2つ。オレンジのユニフォームに身を包みメガネを光らせる仏頂面の男と、形容しがたいほどに目立たない薄青色の髪の子。

「緑間…と黒子か」

途端、心の縁に未練が顔を覗かせるのを気づかないようにして会場をあとにした。

――

――

転校先を聞いた時の俺の感情は実にフラットだった。別に黒子と一緒にだなーとかバスケット誘われんのかなーとか、友達100人できるかなーとか考えてない。なんだよ最後の。小学生かよ。思うところが無いわけではなかったが、部活動というものに疲れてしまっている、というのが素直なところだった。

職員室で挨拶を済ませ、制服等々の説明を受けた後に校内を案内される。平日なので生徒も普通にいるわけで、総武の制服の俺は少し、というかかなり目立っていた。やっぱり私服で来るべきだった、と思っても既におそい。もはや出来ることはすこしでも生徒の記憶に残らないように振る舞うことだけだ。そうと決まればすることは1つ。ステルスモード！

放課後だったこともあり、少しながら部活動の様子も見ることが出来た。件のバスケット部も、だ。案内してくれた教師はわずかながら部活動の紹介もしてくれたが、バスケット部に関してはほぼ知らないといった様子だった。

体育館の入口から少し練習を覗き、学校案内は終わる。職員室で再度挨拶をし、帰路につくところで肩を掴まれる。

??? 「比企谷先輩、なにしてるんですか」

おいおい、肩なんか掴むなよ。人違いだぜ。俺は比企谷で間違いないけどな、人に呼び止められるような人種じゃあないんだよ。わかっ

たら手を離してくれ、な？

??? 「人違いじゃないんで、答えて貰えますか」

ですよねえ…。俺を呼び止める時に肩掴むのは君たちしか居ないもんねえ…。そもそも提案したのも俺だもんなあ…。

八幡「黒子、か。なんだ？俺は今から帰って寝るとこなんだが。邪魔するなら容赦しねえぞ」

そうとも。容赦なく土下座して懇願するね。帰らせてくださいってな。

黒子「先輩の土下座は別に見たくないのはいりません。どうして、うちの学校にいるんですか？」

八幡「…：転校してきたんだよ。親の仕事の都合でな」

土下座するところまで見抜くんじゃねえよ。ちよつと恥ずかしいだろうが。久しぶりに話す黒子は少し明るくなっている、気がした。

黒子「この時期に転校ですか。千葉の高校でしたよね。千葉大好きな先輩が戻ってくるとは思ってなかったです」

八幡「ハツ…：残つてもよかったんだけどな。小町も引越したっしな。小町がいらないんじや、俺の死は確定的だからな。」

小町は天使だからな。天使の恩寵なしには生きられないだろ。これは仕方なくなのだ。

黒子「相変わらずのシスコンっぷりですね。…：このあと少し時間ありますか…？」

八幡「ない、寝る」

黒子「そんなこと言わず…：コーヒー奢りますから」

八幡「…：わかった。どこに行くんだ？」

黒子「近くにコートがあるんです。そこに行きます」

そういつて歩き出す黒子の後につく。コーヒーを餌にされたら仕方ない。もちろんMAXなやつだ。付き合い長いからわかつてるだろうしな。ほんの少しテンションが上がった俺の後ろから、黒子を呼ぶ声がする。

??? 「おい黒子。何一人で先に行ってたんだよ」

振り向いた先にいたのは、大男だった。あ、死んだわ俺。熊相手に

するのは想像したことも無いなあ。

黒子「先に行つといてくれ、って言ったのは火神君ですよ。それに、1人じゃないです」

少し不服そうに黒子が言い、こっちを指さす。火神と呼ばれた背の高い男は俺を見下ろしながら口を開く。

火神「黒子の知り合いか？随分ぱつとしねえな。バスケヤんのか？」

なんだこいつ初対面で喧嘩売ってんのか…。まあ悪気はないタイプだろうがな。だからこそタチが悪いとも言えるな。嫌いではないが好ましくはないかもしれん。というかそもそも、こいつが行くなら俺が行く必要無くないか。

—————
—————

流れのままにコートにたどり着くと、火神はシュート練習をはじめてしまった。ベンチに腰掛けた俺に黒子がMAXコーヒーを持ってくる。

黒子「比企谷先輩は…バスケ辞めたんですよね」

八幡「…黄瀬辺りから聞いたか」

コーヒーを受け取るも、質問があまりに真っ直ぐだったために開けるタイミングを逃してしまう。

黒子「正直、先輩は辞めると思っていました。やる気とか根性とかそういうの関係なしに。僕と同じで赤司君の…いえ、キセキの世代の『変質』に失望してしまうと」

八幡『変質』ねえ…。まあ、よく持った方だと思おうわ俺も。根底がぼつちだからな、そもそもチームプレイとか向いてねえんだわ。だから、その、気にするなよ」

言つて、プルタブに指をかける。小気味よい音を立てた缶を口元に運びコーヒーを流し込んだ。

八幡「…WC、緑間と引き分けたらしいな」

黒子「はい、やっぱり強かったです」

八幡「相変わらず高弾道のロングレンジか」

黒子「まあそれが特長ですから」

八幡「緑間相手に引き分けならまあ上等だろ。赤司、青峰は無理でも、黄瀬くらいならいい勝負出来んじゃないの」

黒子「だと、いいんですけど。とにかく目の前の1戦です。次落としたら話になりませんし」

八幡「次：霧崎第一だったか、心配いらんだろ」

それを聞いて黒子の表情が少し曇る。なにか思うところがあるのか。誠凛は新しい高校だし、選手層の薄さとか気にしてるのかもな。

火神「黒子、あつたまつてきたわ。やろーぜ。」

おう、いいタイミングだ、火神。不安は体動かして振り払うに限る。俺はしないことだけだな。

黒子「先輩も、どうですか？僕じゃ彼の練習相手には不足なんですよ」

火神「おう、やろーぜ！ひき…ひき…ヒキタニ先輩！」

おいやめろ。その間違い方だけは。呼ばれすぎでトラウマになったらどーすんだ。そもそもバスケットは辞めたんだよ…。黒子に視線を送ると俺にも聞こえるかどうかと言った声で一言告げる。

黒子「…先輩にも見て欲しいんです。火神君の素質を」

八幡「……わかったよ。コーヒーの礼もあるしな」

黒子がそこまで言う火神くとやらが、どれほどのものなのか気になった。……仮にどんな才能だろうが、キセキには届かない。あれは1つの完成系だ。

しかし俺は火神大我に期待する

キセキの世代はバスケットにおける才能、一つ一つの技能の完成系だ。しかもそれぞれがまだ成長過程にある。黒子に言わせれば赤司や緑間、青峰のそれは『変質』に思えるようだが違う。それは才能のある人間なりの苦悩、とでも言うべきものだ。

火神「おい、ほんとにいいのか？2on1なんてよ」

黒子「一応先輩ですよ、火神君」

八幡「あ？どつちも構わねえよ。それにお前ら仲間なんだからチームメイトと連携の確認とかいるだろ」

火神の才能、素質を正しく見るなら、キセキと渡り合える玉なかどうかを確かめるなら…。黒子とチームプレイが出来ることが大前提だろうしな。

火神「でもよ、これじゃいくらなんでも一方的……」

黒子「…その心配はいりません、火神君」

八幡「まあ、やるならさつさとやるぞ。早く帰りたしな。ボールはそつちからでいい」

少し物足りなさそうな火神を遮り、ゲームを始める。黒子の言葉に怪訝な顔をしながらも、左右に体を振り幾度かのフェイクを交えて突破をかける火神。これは黒子見てねえな…。がっかりだ。1人でやるつもりなら…。俺を抜いたあと、左に切り替えて Dank、だな。

火神「なっ…!？」

甘いんだよ…。動きは読みやすい、フェイクも滅茶苦茶に上手いわけじゃない、速さだって青峰のそれには及ばねえ。これくらいなら俺でも止められる。

火神「…なにをした。今、何が起きた…?」

黒子「…先輩、バスケット続けてたんですか？」

火神の手を離れ、転がっていくボールを拾った黒子が問う。火神は呆然としているな、ほんとにこいつ黒子が認めるほどのやつなのか？

八幡「人とやるのは最後の全中前の練習以来だよ。軽いトレーニング

グは続けてたけどな。思ったより身体が動いてくれて助かったわ」

黒子「それにしても…。さっきのは赤司君ですか…?」

八幡「…少し違う。赤司のあれは予知に近いが、俺にはそんなこと
できん。単純な予想と誘導だな……。さて、俺の番だな」

火神「…っ！ぜってー止める…」

止められて火がついたか。冷静さに欠けるな。熱意は買うがマ
イナス点だ。…確かに持つてる才能は十分だろうさ。原石としてな
ら一級品だよ火神大我。でもなあ…キセキと張り合うなら足りない
んだよ。黒子と一緒にバスケをするつもりなら知っておけ。

八幡「火神。緑間は強かったか?」

火神「あ?強かったよ、それがなんだ」

八幡「…お前はもつと受けとめるべきだよ『勝てなかった』って
いう事実をな」

火神「…?どういうことだよ…?」

黒子「ツ!?火神君!前です!!」

2、3歩バックステップをした後にシュートモーションに入る。
黒子に言われて火神が慌てて前が出るが、遅い。既に手を離れたボー
ルは、高い弾道を描きながらゴールに吸い込まれた。

火神「…今のは…緑間と同じ…」

八幡「違う。あんな変態シュートは緑間以外には撃てない。今のは
ただ高弾道だけのロングシュートだ」

火神「そんなわけあるか!俺があいつのシュート何本止めたと思っ
てやがる!今更見違問えるかよ!」

八幡「よく似てる、ってことなら否定はしない。だがまあ、俺程度
じゃあ外さないってのは不可能だ」

黒子「…緑間君のスリー、青峰君のフリースタイル、赤司君の天帝
の目。その発想の原点になったのが比企谷先輩なんです」

火神「なっ…」

原点…というのは少し違う。元々アイツらに素質があった。出
来そうだったことを出来るようにする手伝いをしただけなのだ。

黒子「試合には出てませんでしたが、校内でのキセキの世代の練

習相手は先輩でした。6人目だった僕も例外ではありません」

火神「つてことは限定的でもキセキのヤツらを再現出来るってことかよ!？」

黒子「さつき言った3人なら可能だとは思いますが…:どうかしたんですか?」

火神「丁度いいじゃねえか!再現できるならヒキタニをぶつ倒せるようになりやアイツらを超えられる!」

八幡「いやいやいや…:何言ってるの?」

火神「だってそうだろう?キセキの練習相手をやってたやつと練習させてもらえんだぜ!」

八幡「そうじゃなくて、なんで俺が練習付き合うことになってんの。そんなつもりないぞ」

場が凍りつく。火神の驚いた視線を全身に浴びる。よせよ、照れるだろ。視線には慣れてないんだよ…。そういう意味じゃ黒子の影のうすさは昔から羨ましい限りだ。目立たないし。

黒子「先輩、バスケ部入らないんですか?」

八幡「入るも何も、俺はバスケ辞めたんだよ…:部活動も、正直今は考えてない。働きたくないからな」

黒子「でも…:先輩の力は誠凛にとつて必要になると思うんです」

八幡「誠凛バスケ部に対して義理なんかねえよ。転校したばかりだしな」

黒子「…:それなら、僕に対してです」

八幡「あ?」

黒子「僕に対しての義理を果たしてください」

八幡「…:黒子お前、変わったな。そんなこと言うやつだったか?」

黒子「とある捻デレな先輩を見習いました」

八幡「…:わかったよ、部活以外のところで練習付き合ってる」

黒子「そういうところですよ、先輩」

中学当時の黒子からは想像つかないな。バスケ好きは変わってないし、たまにイラツとするあたりも以前と同じだ。だから、具体的

に何が変わったとは言えないが…。

火神「ヒキタニ、もう一本だけ付き合ってもらえるか？」

八幡「…いいぞ。ほんとにラスト一本な」

火神、冷静になったならいいんだが。ポテンシャル自体はかなり高いからな、使い方さえ間違えなけりや俺なんか相手にならんだろ。

火神「今度はちゃんと本気だ」

八幡「…いつでもいいぞ」

黒子はコート外で見ている。火神と俺の1 on 1なわけだ。1度やって警戒されているから誘導もそんなに通じない。アプローチとしてはドライブからのダंकシュートだろうか。だとしたら、プレッシャーをかけて前で守るより少し引き気味で反応するか…。イメージ的には青峰を相手にした時の感覚でいいだろう。何となく雰囲気似てるしな。

火神が呼吸を整え、一気に加速する。予想通りだが、つまらないな…。火神の向かう先に体を入れ進路を塞ぐ、はずだったが失敗した。1歩手前でジャンプし、ゴールへと迫っていた。

八幡「…：…は？」

火神「ツラアツ！」

豪快にゴールを叩く火神と、それを見上げる俺。黒子と言うと、どこか分かっていたような顔をしていた。

未練とか後悔とか反省とか。――奉仕部 side――

あの時、私たちのどちらかでも事情を知っていたなら、あんなふう
に彼を糾弾せずに済んだのかもしれない。そうであったなら、彼は今
も変わらず放課後この部室で……。何度も考えるけれどこの仮定は成
立しない。きつと知っていても、私達は変わらず彼を非難したと思う
わ。わかったような顔で「あなたを知っている」なんて言っておきな
がら、何も理解していなかった。だからこれは私たちの失敗。でも
ね、比企谷君。人間は失敗を乗り越えて、やり直していける生き物な
のよ。

――
――

比企谷君が奉仕部を去って、総武高から転校して2週間。私と由
比ヶ浜さんは持てる全てをつかって彼を探していた。姉さんも葉山
くんさえも利用して……。平塚先生は事情をわかった上で、彼の行先を
教えてくれなかった。すなわち、追いかけるべきでないと。

比企谷君は修学旅行の後、数日の間に転校してしまった。由比ヶ浜
さんですら転校を知ったのは翌日のことだった。その間学校も休み、
平塚先生以外にはまともな説明もしていなかったそうだ。

雪乃「……由比ヶ浜さん、あなたちゃんと寝ているの？」

結衣「ふえ？……寝てる！寝てるよ？」

雪乃「無理しなくていいわ。酷い限が出来てるわよ」

結衣「うー……でも、ヒツキーが……」

雪乃「気になるのはわかるわ。でもそれであなたが体調を崩してど
うするの……逃ヶ谷君のことは任せてちょうだい。姉さんも探してく
れているし」

比企谷君の修学旅行での行動の理由を、私達は彼の転校の後に知っ
た。

――以下回想――

平塚「入るぞ雪ノ下」

雪乃「先生ノツクをしてください……それと、今は少し忙しいのでお

相手できません」

平塚「比企谷のことかね」

雪乃「…はい。私達は彼とこのまま離れるわけにはいきません」

平塚「…そうか。だが、今は少し話を聞いてもらおうぞ」

雪乃「なぜでしょうか？」

平塚「大事な話だからだよ、雪ノ下。由比ヶ浜も聞いてくれ。さて、入りたまえ」

葉山「…こんにちは雪ノ下さん。結衣も」

海老名「…」

結衣「葉山さんと姫菜まで…どうしたの？」

雪乃「なぜ、彼らをここに？」

平塚「それは今から説明するが、その前に。雪ノ下、彼らは修学旅行前に奉仕部に依頼をした。間違いないか？」

雪乃「…葉山くんからは確かに依頼を受けました。ですが…」

結衣「姫菜は…違いますよ？」

雪乃「ええ、確かに彼女は修学旅行前にうちに来ましたが、ただ『男子同士仲良くしてほしい』としか」

平塚「ふむ、聞いていた通りだな。では雪ノ下、この2人が修学旅行中、個人的に比企谷にした依頼を知っているか？」

雪乃「はい…？」

結衣「個人的な依頼？」

平塚「知らないか。これも聞いた通りだな。では、その辺から話すとしよう」

—————回想終了—————

平塚先生の口から語られたのは比企谷君に課せられた無理難題。一方は『告白を成功させたい』、もう一方は『告白を未然に防いでほしい』。葉山くんがその両方の相談を受け、悩んだ挙句に奉仕部…比企谷君に丸投げする。比企谷君は限られた時間で最大限を導いた…そう言えるだろう。

話し終わったあと、海老名さんは泣きながら謝罪した。比企谷君との関係を、奉仕部をぐしゃぐしゃにして申し訳ないと。葉山くんもま

た、同じように頭を下げた。

平塚先生は、もう比企谷君と私達は元に戻れないと言った。

平塚『君達を信頼していたんだよ、彼なりに。自分を知っている、今まで一緒にいた2人だから、言わなくても分かってもらえると。傲慢だったかもしれないが、こんなことで崩れてしまうと思っただけじゃなかったらいいから、こんなことで崩れてしまおうと思っただけじゃなかったらいいから』

だから、彼を否定した私達にはもう無理だと。

けれど、だとしても。彼は向き合うことが出来た。私たちと向き合えるはずだった。それもせず、何一つ言わずに転校してしまうなんて。それは逃避よ。私たちにとって大切だった関係を一方的に終わらせようなんて。そんなこと許されていいはずがない。

チャイムが鳴る。下校時間になり、私も由比ヶ浜さんも荷物をまとめ始める。そこで、私の携帯に電話が入った。相手は……：葉山くん？

葉山「雪乃ちゃん：雪ノ下さん、比企谷が見つかった」

……

私と由比ヶ浜さん、姉さんは葉山くんと待ち合わせ、喫茶店に来ていた。それぞれ飲み物の注文を済ませると早々に比企谷君の話になる。見つかったというのは本当なのかしら。

葉山「これを見てもらえるかな」

結衣「バスケの試合？」

雪乃「葉山くん、比企谷君の話をするのよね？どうしてバスケの動画を見せられるのかしら」

葉山「彼が映ってるからだよ……。これは、先週あったバスケのウィンターカップ予選決勝リーグの動画で、対戦しているのは誠凛高校と霧崎第一高校」

陽乃「説明はいいから、隼人、どこに比企谷君がいるの？まさか選手なわけないだろうから観客席？だとしたら手掛かりとしては薄すぎるよ」

葉山「そのまさかなんです。僕も聞いて、実際に見るまでは半信半

疑でしたけど…。少し、飛ばしますね。」

葉山くんは試合の流れを軽く解説しながら問題のシーンへと動画を飛ばした。そして、第4Q半ば、彼は白と赤のユニフォームに身を包みコートに現れた。

雪乃「…：比企谷君…：ね」

結衣「うん…：間違ってないね」

わかりやすい猫背と寝癖、画面越しの小さな姿でもわかる卑屈に細めた目。その姿は、半年近く見てきた見間違えようなない比企谷君だった。

葉山「比企谷は…：誠凜高校でバスケットをしてるようです」

結衣「ヒツキー、バスケット出来たんだ…：知らなかった」

陽乃「バスケット…：そういえば…：比企谷君の出身中学って…：」

雪乃「どうかしたの？姉さん」

陽乃「うん、比企谷君のこと調べてて知ったことなんだけどね…：彼、帝光中出身みたいなのよ」

結衣「ていこうちゅう？」

雪乃「帝光中学校。確かバスケット部が強かったんじゃないかってか。でも東京の学校だった気がするのだけど」

結衣「ヒツキーって千葉ラブじゃなかったっけ？」

陽乃「家の事情じゃないの？今回の引越しもそうだって話だし。彼元々賢いわけだから帝光行ってもあんまり違和感ないよね」

葉山「…：見る限り比企谷はチームにかなり溶け込んでる。同じ中学出身の後輩もいるみたいだし、もしかしたらもう関わらない方が…：」

葉山くんの言うこともわかる。平塚先生が止めた理由も理解はしている。私達は彼を否定した。否定して、拒絶して…：分かり合えなかった。

雪乃「…：」

結衣「…：でも…：」

雪乃「だめよ」

結衣「…：ゆきのん」

雪乃「彼とこんな形で離れ離れになるなんて、納得出来ない」

葉山「…」

雪乃「…彼に会いに行きましょう」

陽乃「…ふーん。でも、どうやって?」

雪乃「元々、彼と私達の意見がぶつかったのが原因なのだから、正々堂々ぶつかってみればいいわ」

結衣「ぶつかると?」

雪乃「バスケで、よ」

彼が彼のやり方を通して、私達と決別するというのなら。彼が次の場所でもまた自分を貫くなら。正面からぶつかりましょう。私たちの気持ちで。

しかし彼の部活動はいつも突然始まる

火神大我という後輩は粗雑で強引、力押しが目立つプレイヤー。それを補助し強みを十全に引き出すのが黒子とのチームプレイであることはよくわかった。そしてそのチームワークは俺の意図しないところでも、存分に発揮された。具体的な実害を言うならば、俺はこの1週間毎日バスケット部の練習に来ていた。

八幡「…おかしい。これはおかしいぞ」

リコ「どうかしたの？比企谷くん」

八幡「…なんで俺ここにいの…？しかも毎日」

リコ「…何言ってるの？入部するんでしょ？」

入部…？入部と言ったのか。なんということだ。俺は既にそんなところまで追い詰められていたというのか。

……以下回想……

教師「以上でHRを終了する。比企谷、少し来てくれ」

チャイムと同時にHRが終わり、担任になった女性教師に呼ばれる。どこか平塚先生を思わせる少し気の強そうな先生で、事前にクラスの説明もしてくれるようないい教師だ。

八幡「なんかありましたっけ…？」

教師「ああ、どうだ初日終わってみて。何とかやれそうかね」

八幡「普通じゃないっすか。クラスの雰囲気も悪くはなさそうですね。どっちみち俺は空気がたいなもんなんです」

教師「ふふっ、平塚先生から聞いたとおりだな。君は面白いよ」

八幡「平塚先生と知り合いなんですか？」

教師「大学が同じだったんだ。あまり関わりはなかったが、君のことで総武校に連絡したら彼女に繋がったのさ」

八幡「はあ、まあ別にいいんですけど…。用はそれだけですか？なら、帰ります」

教師「まあ待て比企谷。ほら、お客さんだぞ」

そう言っつて先生の指さす先には黒子と火神が立っていて、先生は一言「頼まれてな、すまない」と言っつて教室を去っていった。

……回想終了……

その後火神に捕まえられ体育館へ強制連行された後、バスケ部一同にやや過剰な歓迎を受けた。それ以降毎日欠かすことなく火神と黒子は俺を強制連行しつづけている。

リコ「比企谷くん、見てるだけで退屈しないの?」

八幡「退屈云々はどうでもいいが、早く帰りたい」

リコ「あんたのそういうところ、この1週間で慣れてきたわ……」

八幡「そりやよかった。慣れついでに帰らせてくんない?」

リコ「今日はダメね」

八幡「それ毎日言ってるぞ……」

こんな感じで結局放課後をすっかりバスケ部で過ごしている。黒子や火神、誠凛メンバーの練習は質も量もかなりのレベルで、見ていて退屈はしないのだがどうにも物足りない。チームとしての完成度はそこそこ。黒子が上手く機能すれば、かなりのチームに対して優位を取れるだろう。しかし…黒子に頼りすぎなきらいがある。

八幡「なあ」

リコ「なに? 気になることあった?」

八幡「黒子がいなくなったらどうする」

リコ「え?」

なにその意外な顔。まさか考えてなかったわけじゃないだろ。今までだって黒子を1試合フルで出せてたわけじゃないんだし、これからは連戦もある。怪我やらを考えると黒子なしの試合だって増えるかもしれないぞ。

リコ「…わかってるつもりよ。黒子くんに頼りすぎてること。私もみんなも」

八幡「…対策考えてねえのか」

リコ「考えてはいるのよ。でも彼なしの誠凛じゃキセキの世代と渡り合えない。黒子くんを交えた状態が今のうちの最大戦力だもの」

八幡「わかってねえな……」

リコ「え……?」

わかってねえ。大事なことを忘れてる。このチームは黒子テツヤ

を利用してはいるが、運用できていない。

黒子「どういうことですか、比企谷先輩」

話を聞いていたらしい黒子が問いかける。急に目の前に入るのやめてね、心臓に悪いから。こいつお化けの才能あるわ。

八幡「…黒子、お前のプレイヤーとしての技能は良くても下のうだ。そんなお前を赤司がチームに加えたのは何故かわかってるか？」

黒子「ミスディレクションとハイディングによる徹底したパス回し…ですか？」

八幡「もちろんそれは大前提だ。はつきり言っただけがなかったら必要ない。…いいか、プレースタイルのせいで起こりにくいだけで、対戦相手との1 on 1 になったらお前の勝率はほぼゼロ。そんな黒子でも採用できるだけのゆとりがあつたんだよ」

黒子「…キセキの世代の個人技能の高さ、ですな」

八幡「そういうことだ。お前の技能不足を補って余りある戦力。黒子無しでも負けることがないチーム。それが帝光中バスケ部だった。だからこそ、幻の6人目としてお前が加えられたんだ。だが、誠凛はそうじゃない」

リコ「…今の私たちじゃ力不足ってことね」

八幡「そういうこと」

相田リコ「雪ノ下ほどじゃないができる女の子だ。少なくともバスケにおいてその観察眼は桃井に匹敵するだろう。残念ながらこれから戦うのはその桃井がいる世代だけだな。」

いそいそと帰り支度を進める俺。ちよつとキツめの忠告もしちやつたし居づらいことこの上ない。こういう時はさつきと撤退するに限るのだ。八幡兵法その1『戦術的撤退』ということだ。

日向「どこ行くんだダアホ」

八幡「…何故バレた。気配は消していたはず…」

日向「うちにはその道のプロがいるからな…黒子に比べりゃ比企谷なんか目立って仕方ねえよ」

おのれ黒子「俺のステルスを完全に無効化してしまうとは。」

日向「あんだだけ言っという帰るとかなしだろ、せめて少しくらい遊

んで帰れや」

八幡「…怒ってる」

日向「怒ってねえよ」

リコ「怒ってるわね」

日向「怒ってねえって」

黒子「怒ってます」

日向「だアかアらア…怒ってねえっての！まともに俺達とやってもみねえで戦力不足だのなんだの気に食わねって言ってるんだ」

一同「怒ってんじやん」

日向「なんつで息ピツタリなんだよ！比企谷まで！」

八幡「…はあ…一回だけな」

リコ「ほんと!?やってくれるのね？」ニヤリ

日向「言ったな!」ニヤリ

黒子「じゃあ何か賭けないとデスネ」(棒)

八幡「は？」

リコ「そうね…じゃあ比企谷くん負けたらバスケット部入ってもらふことにしましょう」ニヤニヤ

八幡「…おい」

日向「いい考えじゃないかーリコー」

――

――

黒子「と、いうことで比企谷先輩、バスケット部入部おめでとうござい
ます」

八幡「ぜエ…ぜエ…。3on1は聞いてねえ…ぞ」

黒子「言ってませんでしたし」

スタート時は1on1の体裁を保っていた…。ものの数秒で水戸部と小金井が入ってきたが、それでもなんとか食らいついた俺を誰か
労ってくれ。理不尽とはこれこのことなり…。

日向「…にしても比企谷、ほんとにバスケット部やめたのかよ…全然
動けるじゃねえか」

八幡「やめてたよ。ほんの少し自主トレしてただけだ」

事実バスケットからは距離を置いていた。情報もシャットアウトしていたし、虹村にも連絡をしていなかった。桃井からは定期的にメールが来ていたがそれも彼女が卒業してからは途絶えた。

自主トレも朝晩の走り込みや、筋トレ程度の話。コートでボールに触れるのはこの前の黒子&火神の時が正真正銘、引退以来初だ。

木吉「で、どうだ比企谷。誠凛は」

八幡「なんだよその質問、漠然としすぎだろ」

木吉「そうか…？」

日向「木吉はこういうやつだよ…」

八幡「…まあ次の試合勝つのは、難しいだろうな」

リコ「…理由、聞かせてもらえるかしら」

八幡「…選手が薄すぎる。スタメン5人と控えの戦力差が開きすぎてるんだよ。次の対戦校：霧崎第一だろ」

日向「…ンなもん！俺ら5人でなんとでも…！」

八幡「ならねえよ。花宮いるんだぞ、どう考えても削りにくんだろ。選手のメンタルもフィジカルも」

言われて、日向を含め誰もが押し黙る。思い当たるところがあるのか。どちらにしても花宮相手にまともな戦力が5人というのは問題外だ。水戸部、小金井はそれなりに機能する。昨年の経験もあつてのことだろう。しかしあくまでそれなりだ。おそらく怪我をしている木吉や、どうにも落ち着きのない日向のサポートにはなれないだろう。

黒子「ですが、その問題なら解決しました」

一同「「え？」」

黒子「比企谷先輩が入るじゃないですか」

八幡「…あー」

リコ「そうだったわね、なんか盛り上がっちゃって忘れてたわ…」